

明治22年1月、大阪眞明組（芦津分教会）、大阪明心組（船場分教会）に続いて増野正兵衛ら兵庫眞明組（兵神分教会）も教会設置のお許しを頂いた。しかし、まだ教会の場所や会長について明確には決定しておらず、「おさしづ」を仰ぎながら事を進めていった。

- ・明治22年1月27日（陰暦12月26日）午前8時：清水与之助身上伺（兵神分教会所地所未だ決定せざるに付、清水身上よりその事を伺う）／押して願／又押して願／清水与之助神戸に帰り運び度きに付、お暇を願
- ・同日：増野正兵衛より清水与之助分教会の相談に帰るに付、私も同じ講社の事故同道にて一度帰り運び度きに付御暇を願／前々清水与之助のおさしづの中に『これ元かいな、これが理かいな』と仰せられしは、兵庫の講元端田宅の所でありますや、富田の地面でありますや願、増野一人の心にて伺
- ・1月30日（陰暦12月29日）：神戸へ帰り講元周旋方一同寄って兵神分教会の地所に付談示し、富田伝次郎地面と定めて御許しを願、清水与之助、増野正兵衛兩名より伺／押して伺榊井伊三郎より、先日清水与之助おさしづ中に『これが元かいな、これが理かいな』と御聞かし下されしは、講元端田久吉の所でありますか、又天理教会設立に付きては、磯村卯之助初め清水与之助、増野正兵衛の三名よりだん／／尽力下され、清水、増野兩名は今に於て尽力下さるが、兩名の所でありますか、いずれでありますか
- ・2月4日（陰暦正月5日）：清水与之助身上障り伺
- ・2月8日（陰暦正月9日）午後10時30分：神戸分教会長につき増野に勤めて貰い度き由を講元周旋一同より申入に付、御許し下さるや、いかゞのものでありますや、増野正兵衛身上より伺
- ・同日（陰暦正月9日）：増野正兵衛鼻血朝七八度出で、且左足のくさの障りに付伺

明治22年1月27日、清水与之助の身上の障りを通して、兵神分教会の場所について伺った。「多くの理を運んで居る処、あちらこちら一つにどちらとも言えん」とお言葉があり、押して伺うと、「どちら濃い、こちら濃い、どちらこちら一つの理に治めにゃならん」と具体的な指示ではなく、一同の心を繋ぐことが論されている。さらに押して伺うと「これが元かいな、これが理かいな。一つ目に見えまい」とお言葉があり、「一日々々天より理を下ろす、理を下ろす。一つの理に寄せて心通り下ろす」と、親神の思召に心を寄せようとする、その心通りの守護であると論されている。

そこで、清水と増野正兵衛は一度神戸に帰ることにした。ただし、正兵衛は具体的な場所の指示を望んでいたのか、先ほどの清水の「おさしづ」の「これが元かいな、これが理かいな」というお言葉について「兵庫の講元端田宅の所でありますや、富田の地面でありますや」と伺っている。兵庫眞明組の講元を務めて来た端田久吉宅か、講脇の富田伝次郎の所か。「増野一人の心にて伺」とあるのは、自分自身の心得のためという意味

であろうか。しかし、やはり具体的な指示はなく、「いかなるも談示やで」と、あくまで談じ合いによってみんなの心を寄せることが示され、「一手一つ理が治まれば日々理が栄える」と「一手一つの理」が論されている。

兩名は神戸に帰って早速信者たちと話し合いの場を持った。そして再びおぢばに帰り、改めて30日に「おさしづ」を伺っている。話し合いの結果、「富田伝次郎地面と定めて御許しを願」うこととなったようである。ところが、「理上尋ねるどちら／／とは言えん」とはっきりしたお許しが出なかった。そこで、榊井伊三郎より、それでは端田久吉宅か、あるいは清水、増野のところかと伺った。その際、榊井も、先日の「これが元かいな、これが理かいな」というお言葉について思案したようである。「前々尋ね。これが元かいな、これが理かいな、という理を聞き分け」と応じられて、「神一条の道無き処の道は無い」と神一条の道を示されながら「どちら／／言わん。十分理を以て治めるなら、十と治まりた」と論されている。

5日後の2月4日、清水が「身上障り」で伺うと、「成るよう、行くよう。成らん道は通すとは言わん。しっかり聞き取って、めん／／心発散すれば、身も治まる」と、無理に通すのではなく、成って来るよう通ることを論されている。

それから4日後の2月8日、正兵衛の身上の障りを通して伺ったが、その内容は講元、周旋一同から兵神分教会の会長を正兵衛に勤めてもらいたい申し入れがあったことについて御許しを頂けるかということであった。まず「何彼に治まり難くいから一日の日遅れる。早く理上、治め一条、成らん事をせいとは言わん」と仰せられて、「前々これまでの処話々してある。ぢば一つの理という」と、これまでのおぢばへの移転の遅れについて論されている。「このぢば幾名何人あるか。これから人数何人ある。よう聞き分けてくれねばならん」とおぢばの意義や、そこで勤める者の必要性について説かれている。

その日、正兵衛は鼻血が止まらず、「鼻血朝七八度出で、且左足のくさの障り」についても伺っている。「いつまで見て居てはどうもならん。尋ねたら治めてくれ」と、神意の実行が論されている。「鼻」

『身上さとし』では、2月8日の正兵衛の「おさしづ」について「どちらがよかろうと迷わずに、今日この際に早く理をおさめよという意味で、鼻血は、のっぴきならぬ時期が差し迫っているから、早く理を治めることを指示していただけるのであろう」と説明している<sup>(1)</sup>。

この頃の正兵衛としては、前々から論されてきたおぢばへの移転、会長の選出と教会の場所の決定と、いろいろと思案することがあった。その中で、周りの人々の申し入れもあって正兵衛が会長に選出されたが、それは神意ではなかった。一連のお言葉を考えると、談じ合いとは、人々の総意を得ることではなく、人々の心をあくまで神意に寄せることが重要だと拝察される。

[註]

(1) 深谷忠政『教理研究身上さとし—おさしづを中心として』天理教道友社、1962年、84頁。